



編集室

今、通勤にはモノレールを利用している。以前は車通勤だったが、高架を走るモノレールから見る風景はなかなか良いものである。

先日の夕暮れ時のことである。仕事を終え、多摩センターに向けて走るモノレールの車内から右に目をやると、ちょうど夕陽が山の端に沈むところだった。黒々としたシルエツトを見せる丹沢山塊と富士山の間に静かに落ちていく夕陽が、幼心にも感動をしたもう一つの夕陽を想い出させてくれた。

そのもう一つの夕陽というのは、帰省先の秋田から上野に向かう、蒸気機関車に引かれる三等車から見た夕陽である。列車は帰省先の最寄り駅を夕方発つ鈍行だっと思つて発つてしばらくすると日本海沿いを走る。ちょうど夕陽が水平線にかかる頃である。年子の弟と私は窓から顔を出し、風を受けながら、沈みゆく夕陽と赤く煌めく海面をいつまでも見ていたものである。夕陽が沈むにつれ、海面の煌めきも逃げるよう

に遠ざかっていく。やがて、最後の赤いかけらが沈み込むと、日本海は黒々とした海に変わるののである。

あのとき見た夕陽は、いまモノレールから見ているそれよりは、二倍も三倍も大きかったように思えてならない。いや、本当に大きかったのでは、と真面目に考えてもいる。

都会のビルの谷間に沈む夕陽は、これからの夜の喧噪を想起させるが、多摩キャンパスから見る山の端に沈む夕陽は、人の心を穏やかにさせるとともに心に余裕も与えてくれるような気がする。

今、世の中は激しく変化している。その流れに対応しなければならぬ

し、先取りもしなければならぬ。そんな時代だからこそ、ちよつとした心の余裕が必要なのではないだろうか。学生諸君にも山の端に沈む夕陽に目を向けるような、そんな余裕を持つてほしいと思う。

(入試・広報センター事務部長
尾留川一彦)



Hakumon

ちゅうおう

2002
秋季特別号

2002年(平成14年)9月25日発行 No.176

発行 中央大学広報委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉
広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141